

備中國箭田村大塚調査報告

梅原末治

備中國下道郡箭田村は中國街道に沿へる一驛にして、北方高梁町に南は玉島町に通ずる街道此の所より分岐し交通上の一要點に當れり。此の地其の郡名の示すが如く古く下道氏の郷貫にして、西方近く下道園勝園依母夫人の骨藏器を出せる小田

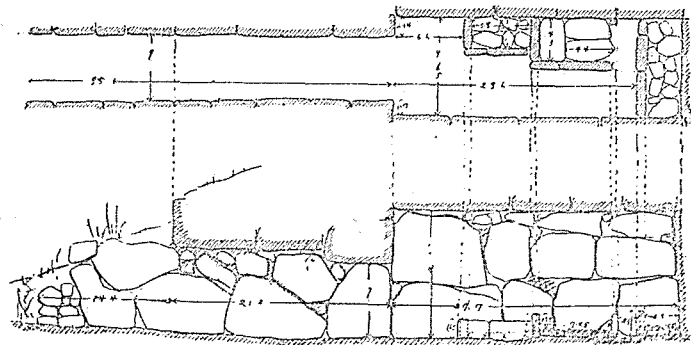
郡東三成に接し現に大字前崎には吉備眞備の墓と傳稱する墳あり、又吉備寺の遺れるありて、往古に於ける開化を想像せしむ。今同村前崎村落の北方約八町、高梁町への道路の西方に大塚なる古墳あり。明治三十四年八月十四日發掘されて偉大なる墓壙と幾多の遺物を發見せるもの也。

余去歲一月、内藤教授、富岡講師の好意に依りて下道氏に關する遺蹟探究の爲該地方旅行中、吉備寺に於て此の塚の遺物を見、又山崎俊隆氏の東

道にて古墳の構造を實査するを得、此の遺蹟が頗る注目に値するものにて、たゞに上古に於ける下道郡の文化を窺ふ上に重要な資料たるのみならず、一般考古學上の研究に與ふる所の裨益少からざるものなるを感じたり。即ち茲に此の稿を草して本古墳の形狀構造を述べ發見の遺物に就て記して以て廣く之を學界に紹介せんとす。

塚は中國街道に沿ひ北方に重疊せる山群の一支脈麓の東南に傾斜せる臺地上に築かれたるものにして、背に山を負ひ前面近く吉備公の墓と傳ふる墳の存する丘陵に對し、東南方は小田川流域の平地を瞰下し朝日照り夕日輝く所、古墳營造の場所として多く見る景勝の地區を占めたり。墳は大なる丸塚にして徑二十五間に上り遠くより其の存在を認むるを得べし。封土の周圍は一部分削られたるが畧原形を存して三段に築き成されたる當初の外形明に遺れり。埴輪圓筒の破片附近に多く散在

し現に一部封土の除去されし部分即ち最下段には猶土中に圍繞して存せる迹を認めらる。山崎俊隆氏の談に據れば發掘の當初の調査に圓筒四重に繞りありしこの事なるが、其の果して然るや否は雜草繁れる際とて是を確むる事能はざりき。たゞ他の例より推し普通圓筒は封土の各階段に圍繞せるものなれ



備中富田大塚墓墳面及断面圖

ば其の四重と云ふ信すべきに近きか。塚の北方丘陵との間に湟の迹かと思はるもの存せるが南方部は既に開墾されて其の部の原形明ならざるを以て今之を決定するに由なし。

此の封土の南側に明治三十四年に發掘されたる墓壇開口せり。形式横穴式の室と羨道の區別あるものにて畧完存す。其の構造を見るに側壁は花崗岩の大石を積み重ね成れるものにて断面梯形をなし、羨道の石と石の接合面には今猶石灰？を混じたる土を塗れる迹を認めべし。室の奥壁は幅十尺高十二尺余の面を一石を以て造り、之を覆ふに室は天井石四、羨道數枚（今三個存す）を以てせり。構作の壯麗なる事殆んど其の例を見ざるもの也。玄室は長二十七尺七寸、幅九尺六寸五分、高さ十一尺八寸、羨道は總長三十五尺六寸（内天井石の存する部分の長さ二十一尺二寸あり。猶此の外入口二三尺の部分は破壊されたるらし）、幅入口に

て六尺八寸、高さ七尺四寸あり。室と羨道の差は天井部に於て四尺餘、西壁に於て二尺一寸四分、東壁に於て一尺七寸を數ふ。是を従來發表されたる正確なる測定をなし得たる最大墓壙の備前國赤磐郡牟佐村のそれに比して猶二尺餘長さに於て加はれるを見る（大和見瀬の丸山の壙は今見るべからず。同國島置之。殊に此の壙に就て注目すべきは玄室内に槲とも稱すべき四個の石床の存し其の構造の複雑なる點にあり。即ち一は玄室の奥壁に接して設けられ、縦三尺三寸、横室に等しく、底は室より高さ一尺内外高まりありて上部平板石を敷き、幅八寸の切石三枚を以て前方と區劃せり。他の三個は是に續き室の西壁に接して一列に存し其の間各切石一を以て別ち、北方のものは縦二尺一寸あり。中央のもの最も完全にて縦七尺二寸五分、横幅四尺三寸、底は厚さ八寸内外の平板石三枚を敷き、室の底面より約一尺五寸餘高し。南端の室は縦五尺八寸、

横三尺一寸、底部又小板石を以て敷けるが中央の床よりも七寸内外低く構造又小形なり。而して兩者共に切石二枚を以て東側の區劃を成せり。是等四個の室は九州西海岸地方に類例多く、中國地方に於ても時に發見さるゝものと形式を同じくし、構造上よりし又後段述ぶる遺物の配列より見れば蓋し眞の意味に於ける槲なるべく、其の底部の形式は筑後國久留米市日輪寺境内にある一古墳の彫刻を有する石槲のそれと同一なり。こは古墳内部の構造の研究及びその部の遺物の埋没状態に於て是を畿内地方に多き横穴式壙のそれと對比する時は研究の上に少なからざる興趣を惹くものなり。本古墳發見の遺物の大部分は今同地前崎なる吉備寺に藏せられありて兩者相比較して調査研究をなす事を得べし。余が調査せる遺物の品目左の如し。

勾玉

三十二個、丸玉

十五個

玻璃玉	二百六十二個、	金環	二個
銀環	一個、	銅環	六個
大刀柄頭	二個、	轡鏡板	一個
刀身裝具殘缺	一括、	馬具類	七個
鐵鏃	十本、		

此の外土器類刀身等ありしこの事なるも是を實見する機會なかりしを以て今述ぶるを得ず。是等遺物が如何なる状態に埋没せしかに就ては、發掘後年次を經、當時の調査書類の存するなければ明確に知る能はざるも幸に其の發掘を目撃されたる山崎氏より配置の概要を聽き畧當初の状態を推察する事を得たり。即ち玄室内の奥壁に接せる櫛の内部には玉類を納め、西壁の三櫛中の北の小室には馬具類あり。中央の櫛上に遺骸を葬り、この東方玄室の底面上に金銀等の環あり。更に羨道の玄室に接する部の西壁側に近く土器類を發見せりと云ふ。其の正面の櫛に玉類を藏して骨片を發見せ

ざりしとは稍疑はしきも、内部の構造上の位置より考へ、又貴重なる玉類の存せしより推せば此の墳墓の主人を葬りし櫛と解すべし。他の遺物の配列が果して上記の如くなりとせば、西側の中央櫛にありし遺骨は陪葬のものと思むべく埋葬の状態又研究上に一新事實を提供せるものと云ふべし。左に發見遺物の主要なるものに就て概要を説明せんに、

一、勾玉、發掘の際には六十餘個ありし由なるも半散佚して今存するは三十二個なり何れも瑪璃製にして黄色を帯ぶ。最大なるもの長さ九分にして最小と思はるもの六分あり。形狀一樣ならざるが輪郭の美麗なる少く、多くは頭部大に失せり。

一、丸玉 水晶製なり。十五個の中九個は大形にして徑四分あり。他の六個は徑二分八厘内外の小形なり。

一、玻璃玉 徑二分、高一分五厘内外のもの百二十七個、小形のもの百三十五個あり。多くは藍色なるが中五十五個は青色を呈せり。

一、金環 二個共に殆んど同形にて長徑一寸、短徑九分のもの。

一、銀環 一個、金環に比して少しく小形なり。

一、銅環 六個あり。大形のもの二個は長徑一寸四分、短徑一寸三分あり。他は金環の大きに相似たり。何れも最初鍍金が鍍銀なりしならんも今痕迹を留めず。

一、大刀柄頭 二個、玉類と共に本古墳發見遺物主要部をなすもの也。共に金銅製にして鳥首を立体的に現はし、一は大形の精巧なるもの金色衆たり。環長徑二寸三分、長二寸五分あり下總國猿島郡猿島村大字金岡字八龍神發見のそれと畧形狀を一にせり。他の一は附着物の腐蝕甚だしきが大体に於て同形にして、環の長徑一寸八

分、長二寸四分あり。

一、鑢鏡板 今存するは一個のみ。普通の鐵製錫張りにして大さ三寸三分、表面に菱形の線を表はせり。

一、刀身裝具殘缺 鞘の一部分なりと考へらる。木片の表部に厚さ四厘の金銅を捲けるもの、斯くの如き拵を有せる大刀の完形は如何に麗しかりしかを想像せしむ。

一、馬具類 何れも鐵製なり。余の見たる七個の多くは破損して其の原形の如何なりしかを知るべからざるも、中に形の完全に近き二個は共に雲珠にして、上部錫を張り、一は徑一寸七分圓形をなし、他は長徑一寸四分、短徑一寸、中央は圓形造りなる菱形のもの也。

一、鐵鏃 二形式ありて一は普通のものにて其數七本あり。他は寧ろ我國發見の銅鏃に通有の式にして、破片を合し三本分となる。

今是等の遺物を通觀するに勾玉、丸玉、玻璃玉等の玉類が多く發見されしに不係獨り管玉の一個も存せざりしは稍異様に感ずる所にして、吾人が古墳發掘品に就て往々耳にする此の種の例の一到數ふべく、亦刀劍裝具に優秀なる遺物を藏しながら甲冑等武器類を見ざる事も古墳の遺物の性質上特記すべき事實ならん。たゞ上記以外に猶刀身、土器類等の發見品ありしも余之を調査する機會なかりしを以て如何なる種類のものなるかを明になし得ず、從て遺物全體の考察に缺く所あるは切に遺憾とする所なり。他日再調是等が補訂をなさん事を期す。

上來記述せる所を總合するに此の古墳の構造上特記すべきは、

- 一、封土大にして埴輪圓筒を有し外形の完美せる形式のものにて、而も
- 二、内部には類例稀なる横穴式大墓壙あり 古

墳墓構造上より云へば内部的石室的塚の最盛時の特色を示せる事。

三、壙の内部の構造複雑にして四個の石槨を有する

四、壙壁に石灰？を混せるものを塗り、營造の術の進歩せるを認めしむる事

等なりとす。而して其の埋葬の遺物が勾玉、刀、柄頭等の優秀なるもの多かりし事亦注意すべき點なるべし。是等に依り吾人は横穴式壙の起源の古くして或地方に於ては既に大土工的墳墓營造の時代に此の大石室的構造が最盛期に達して、兩者併用されたる事を知り得るなり。此の意味よりせば本古墳の如きはたゞに構造の大なるを推すべきのみならず、昨今頻に斯界に論議されつゝある古墳の年代及び様式の研究上に一の新たる資料を提供するものと云ふべく、亦一面從來行はれたる外部よりする年代考定法には調査の上に、研究法上に

幾多の缺漏あり、更に廣く各地に亘りて遺物遺蹟の根本的調査を行ひ、その上に建設せざるべからざる事を感せしむるものなり。

余は内藤教授、富岡講師及び山崎氏の好意に依是が報告をなし得たるを喜ぶと共に今後一層此の方面の調査研究に従はん事を期す。(六月十四日稿)

ナイル河上の人

文學博士 坂口 昂

昨年の春、アルゴースの森の二月の砲戦に、若きジャン・マスペロが祖國のために斃れしを聞きたり。ジャンはガストン・マスペロの子、未來あるピザンツ研究家なりしと。愛兒の不幸の如何に老父の胸を痛めたりけむ、今年この夏、又斯の有名なる埃及學者の訃を傳ふ。六月三十日巴里、博士が晩年の名譽の勤めすなる金石學士院の開會に、或る報告にご起ちて未だ數語を發せざる

に、後ろざまに倒れて復た起たず、行年七十一。思ひ出多きナイルの國よ。今は早や五年以上の昔となりぬ。その折、知り合ひし埃及學者のうち、深き印象を残したる一人はルクソル河岸のマスペロ博士なりき。吾が紀元節、ナイル河畔觀光の好シーズン、余はクレオパトラの舊都に上陸しき。翌カイローに入り博物館に博士を訪ふ。上埃及出張中とてあはず。余は事務員の好意により上埃及の遺物、觀覽券壹葉を惠まれぬ。抑もカイローより上流の觀光客は先づ博物館内古蹟局に就き、金百二十ピアスタを拂ひ上記の如き券を貰ひ、場所毎に提示すべきなり。余はカイローに數日を費し型の如くピラミッドにも登りぬ。いよく、平調なるリビヤの沙丘を左右に、椰子と駱駝と三角帆との河岸の、姫路より東京までに等しき哩路を一日に走りて上埃及の中心ルクソルに着しぬ。さて翌日テーベの大遺蹟見學といふに、始めてかの肝要